高齢化時代の大切なお子様へ

吉沢祥子
附属桐が丘養護学校副校長

はじめに

少子高齢化の社会にいよいよ突入した。以前から、日本は近い将来老人ばっかりの社会になるぞと言われていたが、私自身それは大変だと思いながら、勤務場所が学校のせいか何となく観念的に捉えていたところがあった。ところが、8月初旬のある日曜日、東京近郊へ車で出かける機会があって、大げさに言えば、少子高齢化社会の実風景を体感し、ほとんど恐怖に近いものを覚えたのである。“日本国民がいなくなる”と。

子どもがいなくなるのに、ニートか！

筆者の若い頃（今モ若イト思ッテイマス）日曜日などは天気が良ければ、朝から外で子どもの遊ぶ声が聞こえ、走り回る姿を此処かしこで見かけたものである。ところがこの日、目的地まであちこち回りながら3、4時間車で走った間、目にした人間は、すべてはっきりと年配と呼ばれる世代の人ばかりだったのである。交差点から突然出てくる自転車もお爺さんか、お婆さん。町並みも妙に深閑としていて、子どもの声一つ聞こえない。過疎化現象も在るだろうが、それにしてもまるで子どもの姿を見かけない。この辺の子どもはすべて、TVゲームや携帯メールばかりやっていて外には一切出ないのか？！まさか！日曜日、まして夏休みなのに！本当に子どもがいなくなっていたのだ。話には聞いていたがこれ程いないとは。寿命ばっかり長くなったジジババばかりで、サアどうする？日本から国力を支える実働部隊がいなくなってしまう。積極的に移民を募るか。土地も無く、異質なものに寛容度の低い地震ばかりの国へ誰が来るかい。一挙に短絡的にここまで想念が進んだ。しかし冗談ではなく、政府の予想よりずっと早い速度で人口減、既に3万人減少したのだそうである。

またこの夏、久々高校の同級会があり都

合を付けて参加した。成人病にやられた級友の訃報などちらほら耳に入って来る世代に突入した今、話題はやはり各自の健康、体力の衰えと、昨今の若い人の言動。「戦後の教育はどこかで失敗したのだ、今の若いモンは云々…」と慨嘆している自分達が、その昔、やはり同じ様に今の若いモンは…と職場の先輩諸氏に嘆かれ、戦後20年の教育の失敗だと言われたことを棚に上げて言うのだが。

昨今の学級崩壊現象、すぐにキレて、刃物をふりまわす短絡反応、何もしないニートと称する寄生人生を送る多数の青年群、厚労省の推計（平成16年）では約64万人も居るそうである。なんと64万人！地方都市2､3個分の人数である。（コレヲ中高年ガ身ヲ削ッテ食ワセテイルノカ！）こういった現象を目にすると、私はやはり、どこかにはっきり教育の誤りがあったのではと思わざるを得ない。それは単に、最近話題になっている総合的な学習の時間を縮小するとか、学力低下を防ぐための方策を講じるといった類の問題では無く、もっと根元的な、ヒトに施す教育トハ何ノタメニスルノカと言った視点に、素朴に立ち返って考え直さねばならないだろう。少子化がこれ程進んでいるなら猶のこと、数少ない大事なお子様達にはまっとうな“シティズンシップ”を持った人に育って貰わないと、当然彼らに有形無形に“世話”になるジジババ予備軍の一員である我々はとんでもない目に合う、こんな事を友人達と言い合っていた。

5年前と今

そんな矢先、偶然平成12年教育改革国民会議第1分科会（人間性）の審議報告文なるものを目にした。小渕内閣時代に、戦後の教育が崩壊しだしているのではという危機感から発足した教育改革国民会議が出したものである。当時私はこれを読んでいない。5年前教育に対する危機感から、人間性を育む事に視点を置いて審議されたものであるが、驚くべきは、平成17年現在の世相を憂えての審議報告書といってもよいものだ。

今またここに“こころを育む総合フォーラム”の記事（8月26日読売新聞）が在る。物質的な豊かさの中で日本人は「心」を失いつつあるのではという危機感の中から、遠山敦子元文科相が発起人となり本年4月に発足したもので既に4回の討議を重ねたという。

平成12年から5年。この間に、“生きる力を育む”ために、教育現場はいろいろな手だてを試み、政府は仕事をしない若者のために「若者自立・挑戦プラン」や就職支援施設「ジョブカフェ」（この名称！我々オトナの実に寛大な心を表している）などの整備を進めて来たわけである。しかし5年前

に感じられた人間性への危機感と、今、現在の、日本人の「心」の有り様への危機感。5年前のそれとあまり変わっていない。もしかすると、もっと酷くなっているかもしれないのだ。

素朴な疑問 “なぜ、教育する？”

なぜ教育をするのだろう。人は、人を教育して何を“得よう”とするのか。

人間を教育するとは、社会にその人自身がどう関わって行くかを世代を通して教えて行く事なのだ。そしてそこで、見えない部分をも感じ取る感性を、言って見れば優しさを育てる事である。他人や周りへの優しさを育てるとはどういう事か？周りへの優しさとは、畢竟、自分が我慢し忍耐しなければなし得ないことなのである。したい事を自由にして、欲しい物を欲しいだけ取って、そのまま許されて良いのははっきり言って乳児期だけだ。人間は、したい事だけしているわけには行かない。したくなくてもしなくてはならない事が世の中には厳然と在るという事実を知り、自分の欲望を抑えて他者に与える様な葛藤の痛みを通して、他者を理解し、自分をコントロールしながら関わりを持つようになる。心理学者マズローが、人間の欲求を生理的欲求から自己実現の欲求まで5層のピラミッドで整理した。教育はこの様に世の中に在りたい、この様に世の中に関わって行きたいという個々の希求に対して、具体的な技術や知識を習得させると同時に、それぞれの人間が、個人として社会との関わりにおいてバランスを取りながら生きていく時の、“耐える力”を様々な体験や活動を通してしっかりと“得させる”のが役割の1つだろう。“耐える力”は個々の関わりの中で、周囲への優しさや、己の活力の土台となる。教育は様々な局面で、世の中の千差万別の価値判断の在る中、己の価値判断と他人様のそれは違うけれどそれをどう忍耐強く折り合いをつけていくか、その知恵を育てるのである。（しかし、私も含めて、人間というものは実にやっかいな生き物で、嫌だ、損だと思う事はやらないか、やらないで済む様に知恵を絞るのである。だが、これとて、周りとどう関わって行くか学んだに於いては、一つの成果かもしれない。）

教育活動に、少しでも強制や我慢の場があるとそれはもはや“良い教育”ではないというような論調を目にしたことがあるが、心底そう思っているのだろうか。語弊をおそれずに言うなら、私は、良い教育というものにはある程度の強制や我慢の場がむしろ不可欠の要素と思っている。乱暴に言えば、いかなる教育も学習も始めは強制や我慢の場があってこそ自由な展開の場が出てくるのだ。8月19日東京キャンパスで行わ

れた附属学校教育局夏期研修会で講演とすばらしい演奏をされたヴァイオリニストの和波孝禧先生は、お話の中で指導方法についての質問に、本人の持つ長所を伸ばすようにという事が良く言われるが、一流の演奏家になるかどうかはともかく、弾くためには短所の方をそのままにしておいて良いのかと思う。また、レッスンを受けるなら、その為の練習をきちんとしない人にはレッスンの意味が無いという事をおっしゃっていた。長所の方は本人にも心地よい練習となるだろうが、短所の方はそうは行かない。矯正を強制され、耐える力も克己心も必要だろう。演奏もさることながら、意味深いお話を聞く事ができたと思う。

ハラのへる教育

私の勤務する桐が丘養護学校は、肢体の不自由さと伴に様々な障害がある子ども達が学んでいる。教育の究極、社会にその人間自身がどう関わって行くかということについて、非常に短絡的な物言いを承知で言うが、学校では我々職員も、保護者も、子ども自身も日々それを考えていると言っても過言では無いだろう。私たちは、彼らがある時は“図々しく”、ある時は“慎ましく”どんな風にも社会との関わりを持って行けるように真剣に考えて来た。特殊教育の世界が、特別支援教育へと大きく転換し、特殊学校は特別支援学校として、個々のニーズに沿った個別の教育支援計画、移行支援計画を元に卒業後の社会参加まで支援して行こうというこの制度の理念を、語弊を恐れずに言うなら、桐が丘の担任や、進路指導の担当者はご大層な文書や計画書として残しこそして来なかったが、ずっと具現実行して来ていたのである。

子ども達のそれぞれの有り様で、どんな風に社会構成員の一人としての居場所を持つのか。今でも思い出すのは数年前に退職されたある先生である。担任する子ども達の卒業後のために、本人、保護者と何度も話し合い、真冬も真夏も東京中の（いや、関東中と言っても良い）訓練機関、行政関連部門、民間作業所、一般企業などをあちこちと訪ねていた。彼らの不自由さのために、手作りの無骨な道具を授業の合間に色々と考え出し、（今思えば、桐が丘で特許出願しておいたら良かったと思う物もある。）生徒達に時には徹底的に頑張らせていた。その独創的で闊達な授業を皆楽しみにしていた。この先生を始め、個人で忍耐強く黙々とやっていた数々の事が、特別支援教育として制度的に整備されるのは大変結構である。（計画書ヲ書クバカリデナク、実際ニ体ヲ動カスナラ。）

この先生はよくこう言っていた。「（子ども達の）ハラのへる教育をし、活字の好き

な子を育てよう。」この素朴で簡潔な言葉には、障害の有る無しに関わらず、教育に不可欠で大切な要素が凝縮されている。この先生の理念と伴に健全なシティズンシップが育ったこのクラスの子はとても仲が良く、今それぞれに社会で働いており、保護者の方もこれまたとても仲が良い。

少子高齢化社会の到来！これ以上ニートの数が増えない様に、数少ない大切なお子様には「ハラのへる教育」をして、“我慢”もして貰おうじゃありませんか。そうでないと、我々はおちおち年も取っていられない。

（よしざわ　さちこ）